

□ ータリーの国際協議会出席を機会に旅行記とアルバムを作り、同期のガバナー・エレクトの皆さんに一方的に送りつけた。

送りつけたと言うのは、旅行記もアルバムも全て自分本位のものであり、手前勝手なものであるからで、貰ったほうもビックリしたか、呆れたのではないだろうか。

過去二回の国際大会の時もそうであったが、写真交換と称して帰国後に、旅行記とアルバムを作り参加者に贈ったのである。この時は、同じ地区内のロータリアンであるからと、旅行の思い出にと差し上げたのである。殆んど同じ行動をしていたし、人数も十五人くらいで、全員が写真に写っていたし、旅行記の中にも登場していたので共感を得やすかったのだろう。好評であったし、中には一生の思い出になりますとか、私の宝物とします等と、言われ満更でもなかった。

しかし、今回は協議会が開催されたアメリカ、サンディエゴで合流した人たちも居り、ガバナー・エレクトが三十四人で、その殆んどが配偶者あるいは家族を同行していた。会期中も全員が揃うことは殆んど無く、全員の方の写真も撮っていないし、一言も話をしない人もいたのではないだろうか。それが、突然旅行記・アルバムが送りつけられたのであるからビックリである。こちらとしては、ビックリさせることが目的ではないのだが、送られた方々がどんな反

## 国際協議会旅行記余話



〔旅行記とアルバム・合わせて一冊〕

応をするかも楽しみのも一つではある。

一月二十六日に帰国後、体調を壊したので、帰国報告書『国際協議会に参加して』を書き始めたのが、二、三日経ってからである。原稿用紙一〇枚（四、〇〇〇字）の長文になってしまった。「ロータリー秋田」と「ガバナー月信」の原稿は、報告書の一部をそれぞれカットして誤魔化してしまった。その後、旅行記を書き始めたが、長いながい、原稿用紙五十五枚（二二、〇〇〇字）である。書く方も大変であったが、読む方はもつと大変であろうと思われる。

発送後、数日すると、最初に電話が入った。賞賛とお礼の言葉であった。写真だけでは、その場がなかなか思い出せないが、文章があると、鮮明に記憶が呼び戻され大変嬉しいとのことであった。次に、メールが幾つか届く、やはり思いがけないものを送っていただき感謝すること。その後、何通もの礼状が届いた。写真を撮らなかつた方が居られて、本当に嬉しさで感謝の気持ち伝わる文面であった。

その後開催された横浜での会員増強セミナーに参加した折にも、何人もの方々から、お礼を言われた。「家内も大変喜んで、奥様にもよろしく」と言われると最高である。しかし、文句は言われないが、顔をあわせても「あ、どうも」では、自分のことを差し置いて、「この人どんな人」なんて思ってしまう私って、自分勝手ですね、やつぱり。

（ドデシタ）